

はじめに

考古学は、モノに残された情報から失われた社会や、人々の生活などを的確に復元できる学問である。とくに文字で書かれた時代(歴史時代)では、資料が正しく時間軸、空間軸上に位置づけられることで、文献史学(歴史史料学)との協業が容易になったり、解釈が困難になったりする。それが、「年代の定点」にかかわるジレンマである。

モノをあつかう以上、型式には時間幅があり、付加される時間軸上の情報も性格はさまざまである。また、生産年代と消費年代も正しく整理されなければ、あるいは理解された上であつかわなければ、無用の混乱を招くばかりか、歴史上の事実さえもねじれてしまう。

だから、遺跡の発掘調査に携わる者は、地球上のどの座標に、どの層位から、どのような遺構とのかかわりから遺物が出土し、遺構が検出されたかを地道に記録し続ける使命がある。そうした記録の蓄積が、より豊かな歴史的事実に基づいた歴史著述に結実していくことになる。

さて、定点とは何か。「定点観測」「定点カメラ」などの定点は、一般的に定まった位置、空間座標上の点をさすが、考古学では少々意味が違って使われる。「編年の定点」とか編年基準として、時間軸上の基準を示すことが多い。

考古学資料は、型式学的な前後関係や層位学的な新旧関係は把握できるが、時間軸上の位置づけは、別の因子が付加されることで達成される。その因子は、C14などの自然科学的方法による観測や、木簡や漆紙文書などの紀年銘がある遺物との共伴関係、さらに、資料に直接記された紀年銘などである。

これらの因子を加えることで、大海を漂う考古学資料という船が、時間という流れの中で港という座標に碇を下ろすこととなる。この碇を下ろした港の地点こそアンカー・ポイント、年代の定点である。本書は、そうした意味で「定点」といった言葉を用いることとした。

歴史時代の考古学が、文献史学と協業を重ねる上でこのアンカー・ポイントは、とても重要な鍵となる。そこで現状のような資料が定点資料として蓄積されているのか。関連資料を整理し、論点をあぶりだしたのが、本書である。本書ではまず、高橋照彦が「古代の編年研究と実年代をめぐる諸問題」として、定点資料をあつかう上の留意点や、自然科学的な年代比定の問題点など研究の総論を詳述した。続く田尾誠敏は、神奈川県相模型土器について型式変化を追い、四類型の実年代資料との関わり方を考慮したうえで、型式に実年代を付与する実践的な論考とした。また春日真実は、新潟県の古代土器研究を概観し、編年研究に重点を置いた論を展開した。さらに加藤貴之は、直接土器に年月日がかかれた千葉県紀年銘墨書土器とその相伴遺物について論述した。

巨大地震は、広域災害をもたらし、その爪痕は、同時性という情報を遺跡に残す。滝澤誠は、弘仁地震と土師器の甕、有吉重蔵は元慶地震と国分寺瓦の生産にかかわる問題を徹底的に分析した。土師器の甕では遺跡の同時性、瓦では復興といった視点を加えることもでき、今後、必ず来る巨大地震を考える上でも重要な視点といえよう。

荒井秀規は、年代の定点資料にかかわる木簡や墨書土器、漆紙文書などを丹念に収集し、それぞれの諸課題を明らかにした。第3部はその一覧であり、挿図は庄巻である。読者は、ぜひ博物館の特別展示などの機会に原典(実物)にあたり、新しい発見につなげていただきたい。

眞保昌弘、滝澤匡、前澤和之は、古代の金石文を定点資料とする視点から地域史を再構築した。眞保昌弘は、那須郡の成立と寺院や古墳などのかかわり、滝沢匡は、多胡郡の建郡と近年明らかとなった多胡郡正倉群について、そして前澤和之は、多胡碑に山上碑、金井沢碑を加えた上野三碑と地域史の新たな視点を論述した。

このほか本書は、栃木県の下野国府と下野薬師寺跡にかかわる定点資料、あるいは埼玉県川口市三ツ和遺跡の木簡と共伴した遺物についての小論を取めた。

ところで、日本の小学生は、三年生で「私たちの大好きな町」、四年生で「私たちの県とまちづくり」、五年生で「私たちのくらしと国土」と社会科を学習する。そして、六年生で日本の歴史を学ぶ。

日本の歴史を学ぶまでに子供たちは、身近な場所から始まり、自分が地球上のどこにいて、どのような社会の一員であるかを次第に学んでいく。そのうえでこの国に起こった出来事と人物を時間軸の中に位置付けながら学び、そうした歴史をもった国にくらす社会の一員であることを学ぶ。

子供の発達段階にそった学びは、定点研究のありかたとよく似ている。この地球上の三次元座標に時間軸上の位置を正しく加えること、アンカー・ポイントを確実に打つことが、まず、本書の目的である。本書が、多くの方々によって新たな研究視点を生み出すことができれば幸いである。

なお、新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、オンライン開催となった第十一回東国古代遺跡研究会(令和四年二月五、六日)の研究発表に本書は、基づいていることを付記しておきたい。最後に、公私ともに大変な日々を過ごされているなか、御講演、御発表いただいた方々、またZoomで御参加いただいた方々、さらに機器の提供や運営で御迷惑をおかけした国士館大学や事務局の皆様には、感謝の意を記させていただきます。

二〇二四年四月日

東国古代遺跡研究会会長

田中 広明